

# Andalucía の洞穴住居調査 — グアディス —

黒川 威人

## はじめに

ヨーロッパ大陸には遺跡も含め洞穴住居が数多くある。特に、スペインにおいては石器時代のアルタミラやラ・ピレタの洞穴がその原始壁画の故に有名であるが、二十一世紀も近い今日もなお、洞穴住居に何万人もの人々が住んでいることはあまり知られていない。

洞穴住居と聞くと、暗く陰湿で薄汚れたスラム的イメージを抱きがちだが、我々が調査した南スペインのアンダルシアでは、人々は清潔でしかも思いのほか明るい洞穴で、人生を楽しみつつ生活を送っている様にうかがえる。

クエバス (Cuevas) と呼ばれるその洞穴住居群は、普通の家、つまりカーサ (Casa) の代用などではなく『クエバス住居様式 (文化)』とも呼ばれるべき独自の発達を遂げているが、何よりもその、周囲の自然景観を破壊しない家屋構造は見事な自然と人工の共存であり、むしろ未来的と呼ぶにふさわしい。

以下、1983年4月の予備調査と1987年7～9月に本学の海外長期研修費を受けて実施した実測調査結果のうち、グアディスを中心にとりまとめ報告する。

## 1 アンダルシアの各洞穴住居集落の概要

### a. グアディス (Guadix)

グラナダから東へ数10キロ、古くからの交通の要衝の地であるが、その規模と質において最大でありメッカと呼ぶに値する。10数キロ北の近郊には陶器の生産で名高いプルレーニャがあり、ここでは業務用空間として多く使用されているが、この辺りは地質的にクエバスが適していると考えられる。調査は主にこのグアディスで行なった。

### b. クエバス・デル・アルマンソーラ

### (Cuevas del Almanzora)

地中海に面する長い海岸線を有するアルメリア県の東北端に位置し、地中海とも近い。ここではより急峻な崖地に彫られているが、岩質が柔らかく彫り易いため人工的に設けられたテラスに整然と並んでおり中には2階屋もある。

しかし最近は、すぐそばに建てられた近代的な鉄筋コンクリート造の集合住宅への移住が進められているらしく、クエバス集落の規模としては小さくなりつつある。

### c. セテニール (Setenil)

ここは外観的には近代的だが、本質的には最も初源的な横穴住居に近い。即ち、若干は削り取ったにせよ、基本的には川沿いの天然の岩のくぼみを利用して、ファサードだけを人工的に築いたものであるからだ。

以上、いずれも自然を圧して構築するのではなく、自然と融合しつつ、必要な空間のみを掘り取った負の造型である点で一致する。

アンダルシアにはこの他にも数箇所のクエバスの名を冠した地名があり、相当数の洞穴住居群が存在すると思われる。なお、参考のため旧石器時代洞穴跡を2か所実地踏査した。

## 2 洞穴住居のメッカ、グアディス

先述したようにグアディスは県都グラナダより東へ57km、東部地方との交通路の重要な地点であるが、グラナダ同様シェーラ・ネヴァダ山脈に近く水資源に恵まれている。

シェーラ・ネバダから流れるグアディス川が街の西南部をかすめ、やがてファルデス川へ注ぐため、この街より北方にかけて豊かな沃野が広がっている。その富に魅せられ、ローマ帝国はこの地にローマ植民地の称号を授けたし、後のイスラム時代には堅固な城塞が築かれ、更に

下ってレコンキスタ後にはキリスト教の大聖堂が築かれたのであった。

このように、豊かな土地を背景にグアディスには遠く有史以前から人間が集住し続けてきたことは明らかであるが、現在のような洞穴住居群がいつ頃形成されたかは定かではない。しかし、現在もなお街の人口のほぼ5分の2に当たる1万人が洞穴に住んでいると見られ、その規模と住居様式の発達度においてスペイン最大と見られている。

街の全体のプランは、街道が交差するロータリー近く、川を見おろす高台に大聖堂がそびえ、これを馬蹄形に取りまくように街なみが連なり、さらにその外周を洞穴住居群が取りまいているが、街はずれのあたりでは前面は普通の家で後面が洞穴という半洞穴住居となっている。

なお、街全体が大聖堂を中心に階段状の傾斜

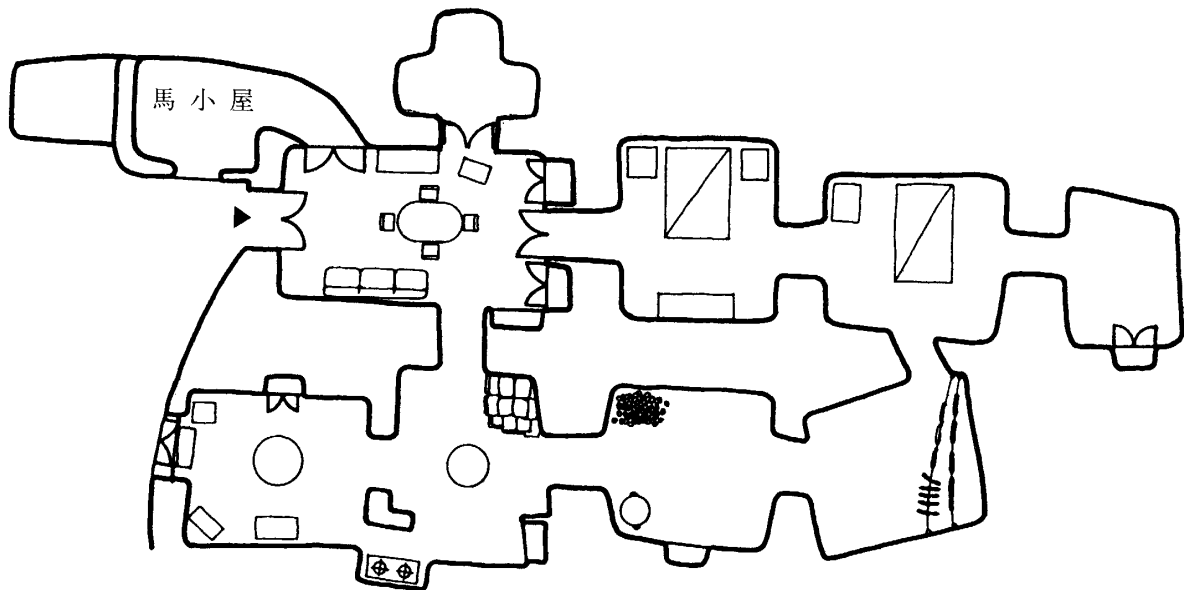
地となっていることは、他の多くのヨーロッパの都市と同じである。

グアディスの洞穴住居の特徴は、砂れき混じりの粘土質の岩盤で彫り易く、しかも小丘が連続する傾斜地で住居群が形成しやすいところにあると思われる。また、地下水に恵まれており井戸を持つ家が相当数あることも特長である。

現在はかなり公共の水道に取って代わられているが、周縁部では共同の井戸を使っている風景も未だ見られる。

### 3 実測結果

以下に実測結果のうちグアディスの13軒について、そのすべての平面図を若干の解説とともに示す。なお、ナンバーは調査の順序を示すものであり、サンプリングはランダムである。

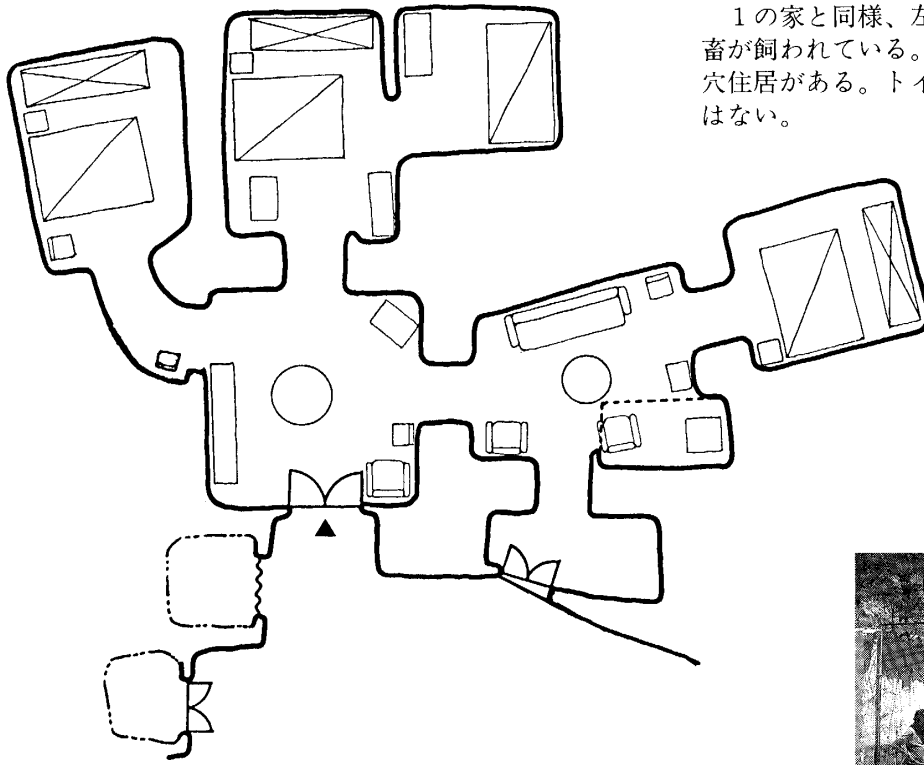


#### No.1 Juaquin Tejada Pere

百姓家であり馬2頭が飼われている。馬小屋は屋根付きの洞穴外建屋だが洞穴部とはトンネルでつながっている。洞穴住居内にはトイレ水道はない。



写真1 No.1の家外観



1の家と同様、左手洞穴外建屋に豚などの家畜が飼われている。すぐ右隣には息子夫婦の洞穴住居がある。トイレ、水道とも洞穴住居内にはない。

No.2 Adura Hernandez Perez

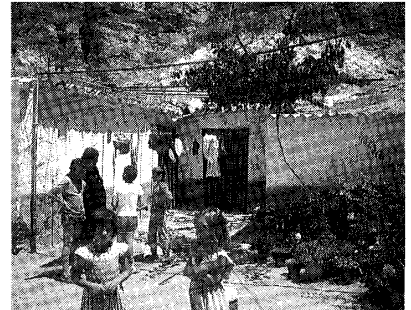
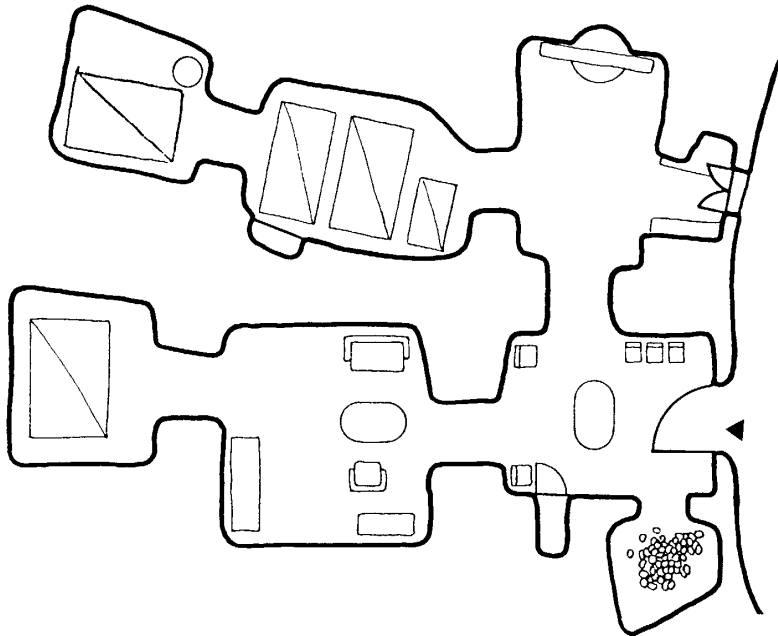


写真2 No.2の家外観



No.3 Rosario Fernandes Santiago

母親が出産のため入院中で、子供達だけのジプシー家族が住んでいる。食事はやはりジプシー家族の5の家と一緒にさせてもらっている。トイレ、水道共になし。(写真22参照)

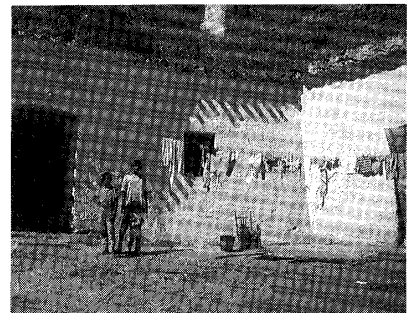
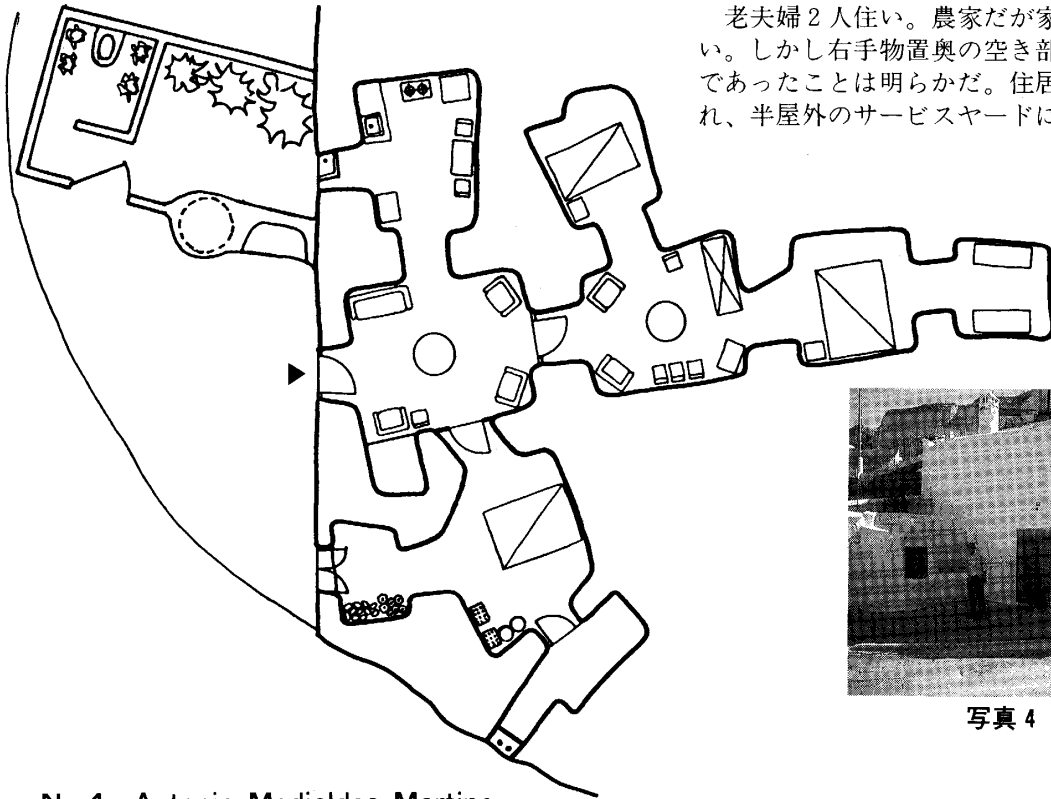


写真3 No.3の家外観



老夫婦2人住い。農家だが家畜は飼っていない。しかし右手物置奥の空き部屋は元家畜小屋であったことは明らかだ。住居内に水道が引かれ、半屋外のサービスヤードにトイレがある。

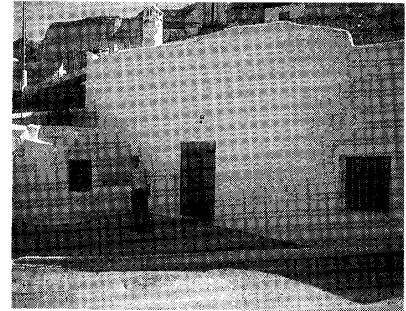
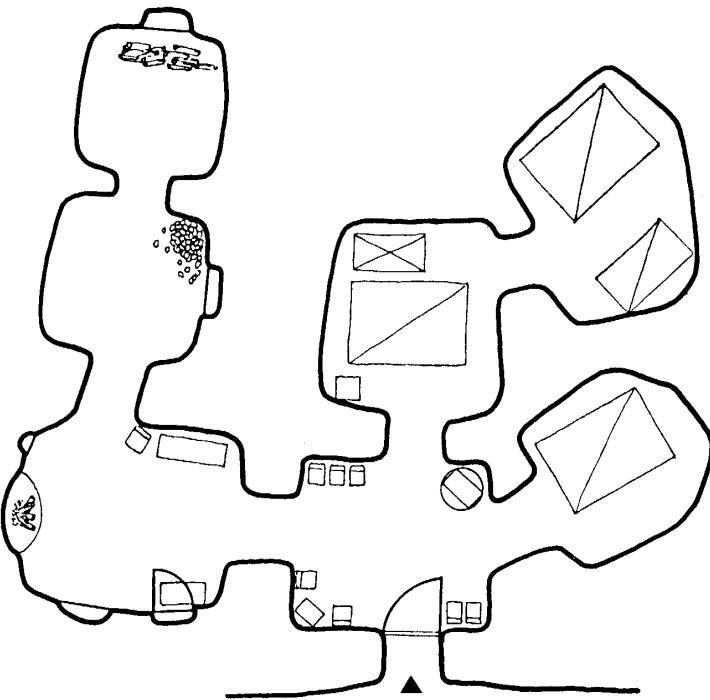


写真4 No.4の家外観

No.4 Antonin Medialdes Martine

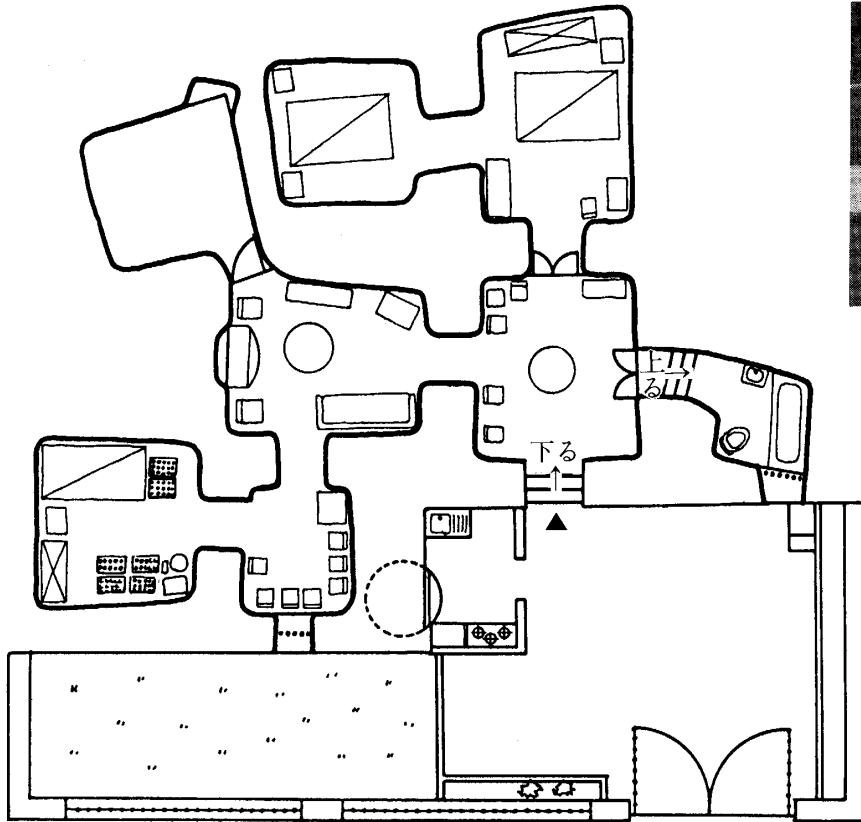


もっとも原初的な住いのジプシー一家。長男はグラナダでフラメンコ歌手をしている。トイレ、水道共になく、炊事は暖炉の薪で行っている。



写真5 No.5の家外観

No.5 Marisoleda Santiago Heredia



No.6 Carmen Lopez Hernandez

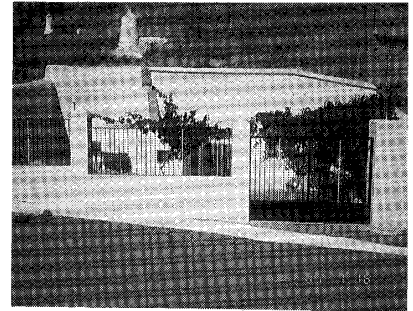
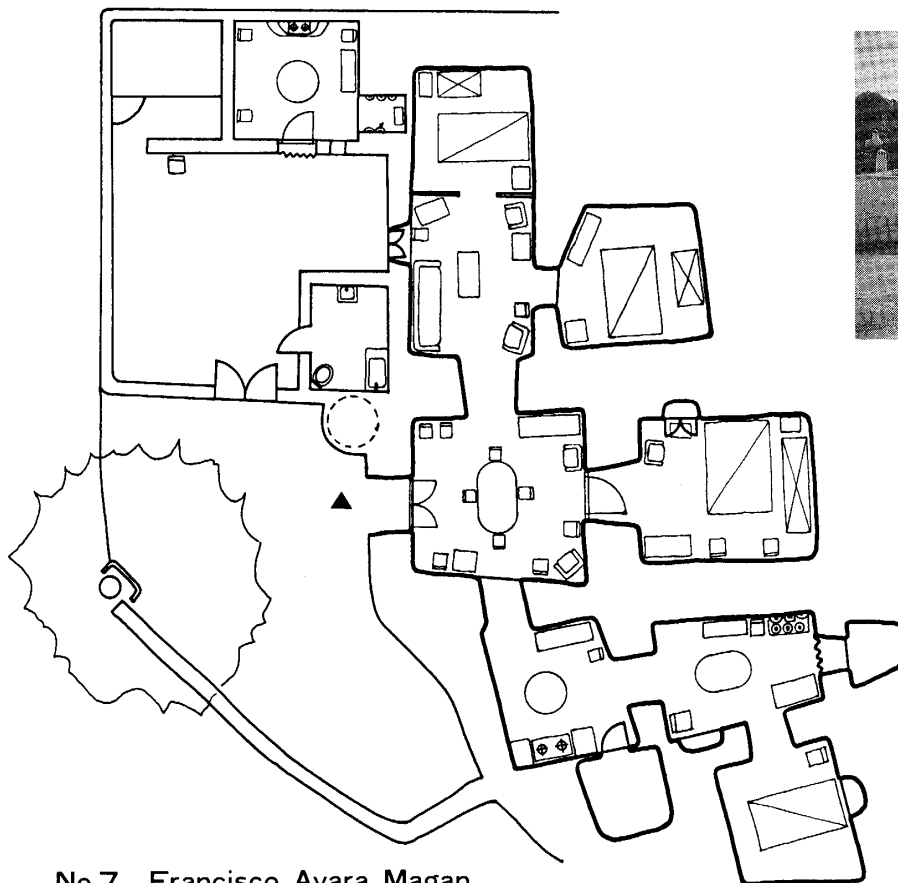


写真6 No.6の家外観

主人はサラリーマン。  
 洞穴内に素晴らしいバス  
 ルームを持つ。キッチン  
 は洞穴外建屋にあり、井  
 戸が使える。  
 (写真24参照)

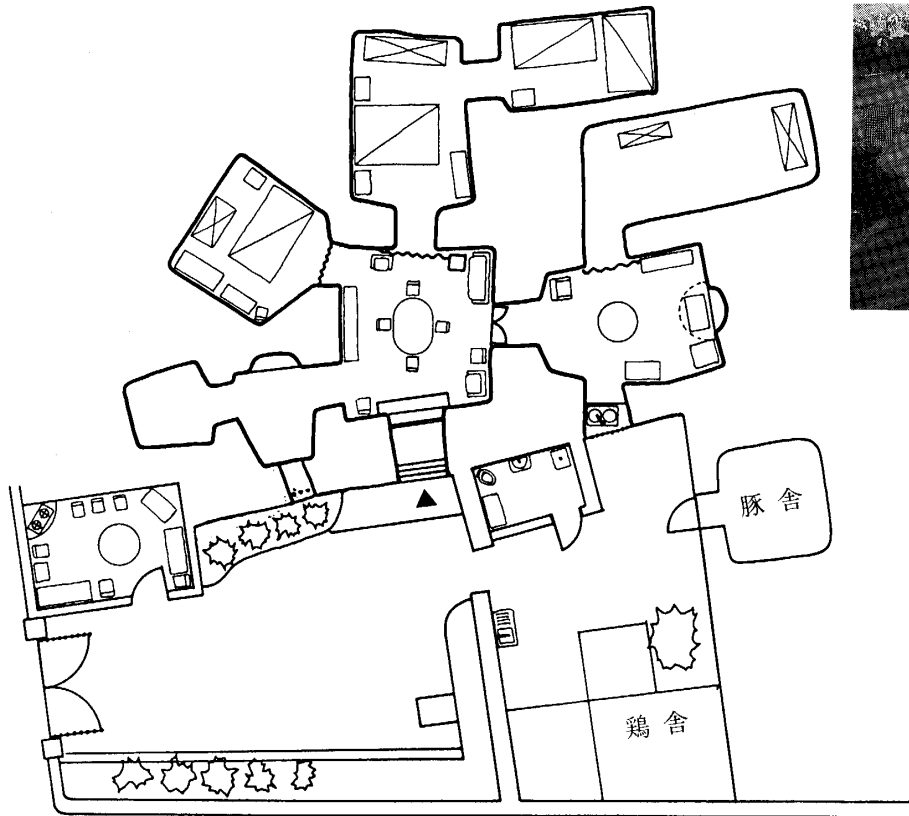


No.7 Francisco Ayara Magan



写真7 No.7の家外観

洞穴外に半屋外のサー  
 ビスヤードを設け、サニ  
 タリーおよび応接の小サ  
 ロンを持つ他、各室をつ  
 ながり動線も機能的で、発  
 達した洞穴住居の典型。  
 大きな火炎木がある。  
 (写真19.20.26.27参照)



No.8 Antonio Encinas Casado

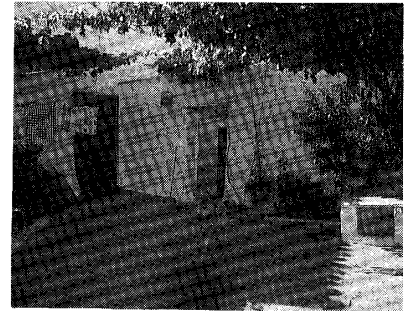
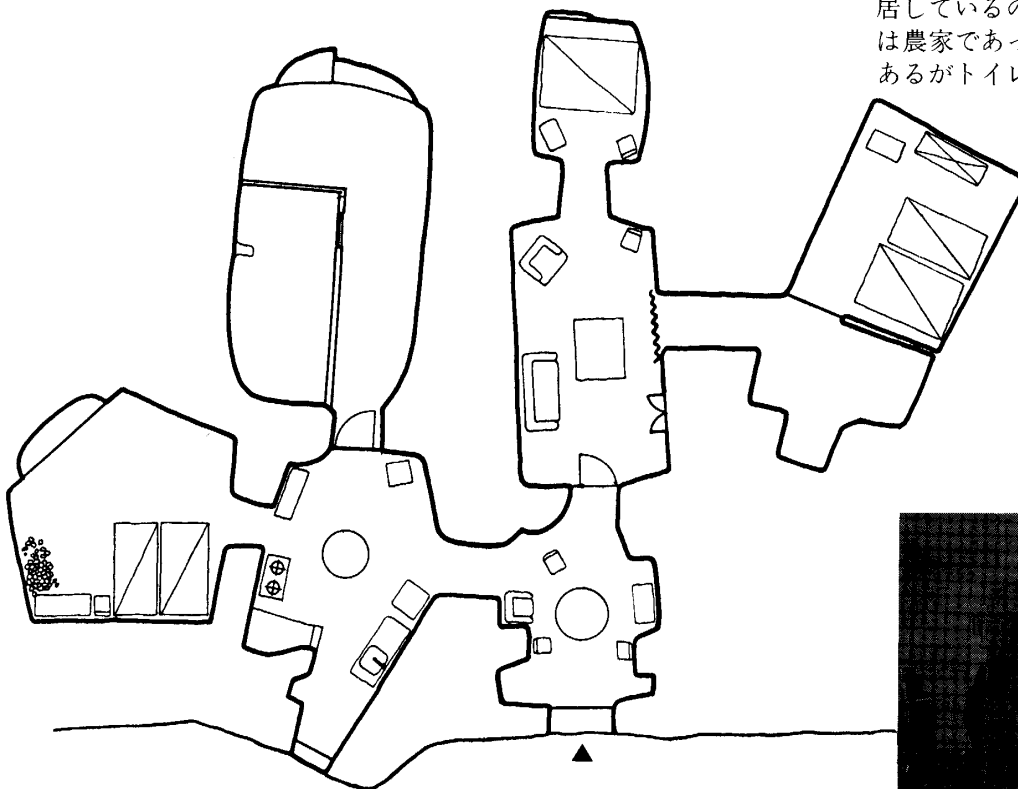


写真8 No.8の家前庭

半屋外のサービスヤードの他に門扉付きの前庭を持ち、炊事施設の整った接客サロンを持つなど最も発達した洞穴住居の典型。  
(写真25.29参照)



No.9 氏名不詳 (聞きもらし)

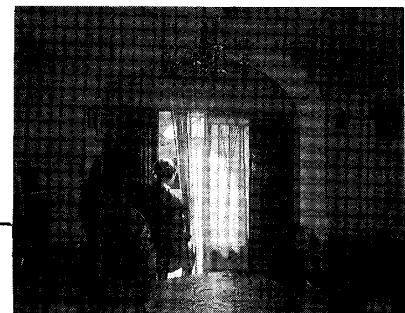
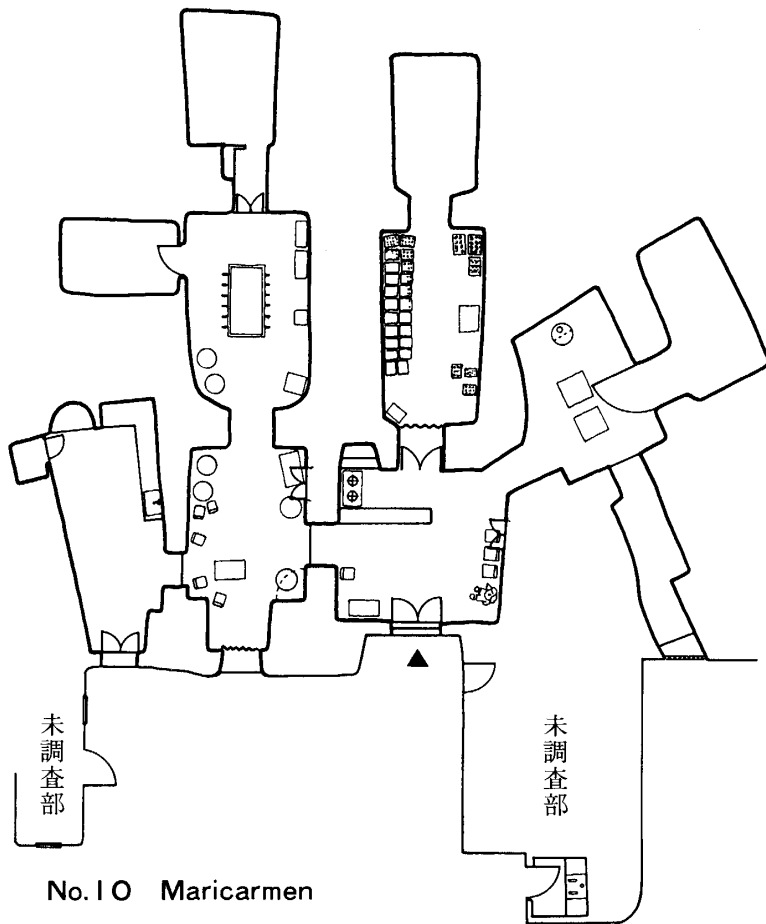


写真9 No.9の家入口の部屋

元家畜が飼われていたと思われる囲い付きの空き部屋が有る。現在入居しているのはジプシーの様だが元は農家であったと思われる。水道はあるがトイレはない。  
(写真30参照)

(写真30参照)

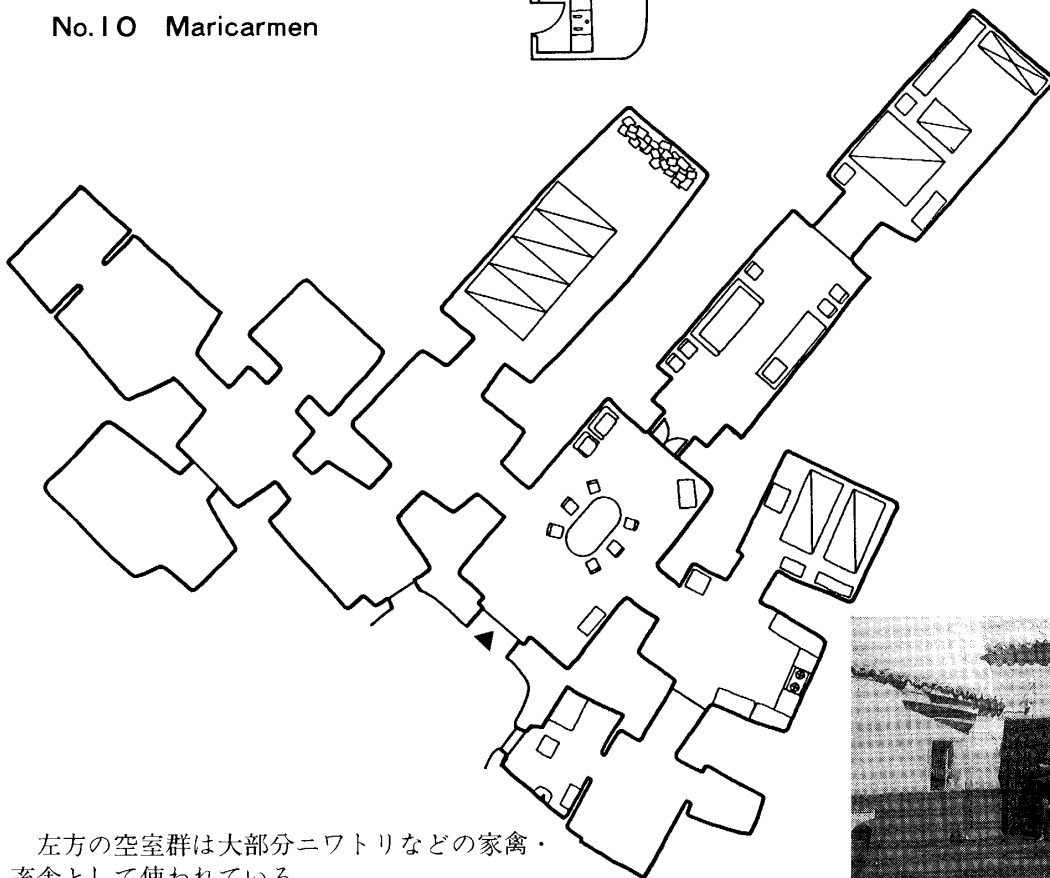


No. 10 Maricarmen

もと住宅であったが現在はBAR（一杯飲みや）として使っている。右手奥の物置部屋は明らかにもと馬小屋である。右袖建屋は元サービスヤード、左袖は元家畜舎であったと思われる。外観的には小庇を持ち普通の家に近い。（写真28参照）



写真10 No.10の家外観



左方の空室群は大部分ニワトリなどの家禽・畜舎として使われている。

No. 11 Manuel Arenas Sanches

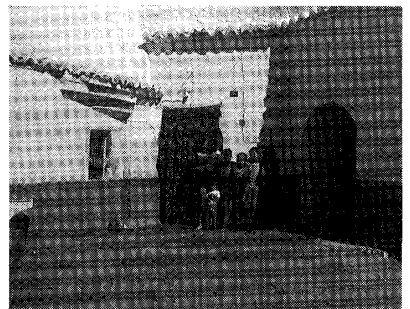
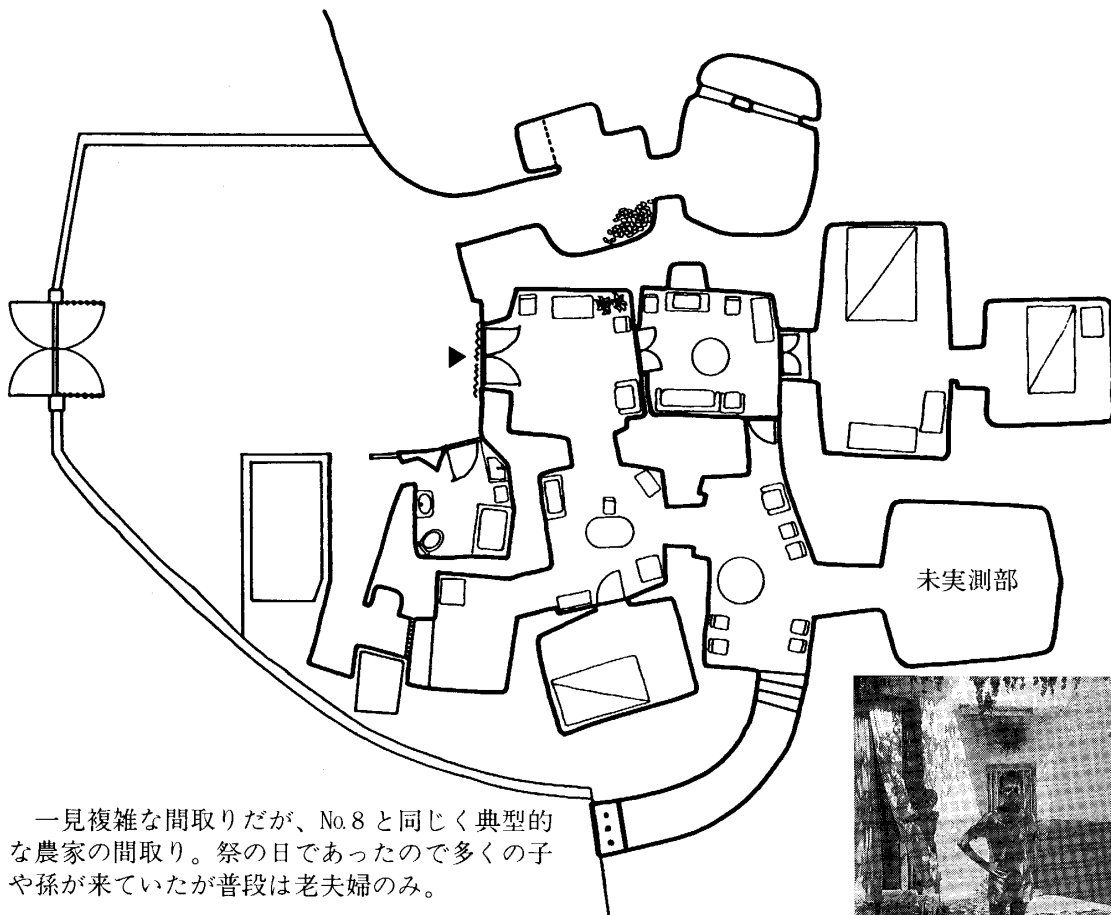


写真11 No.11の家外観

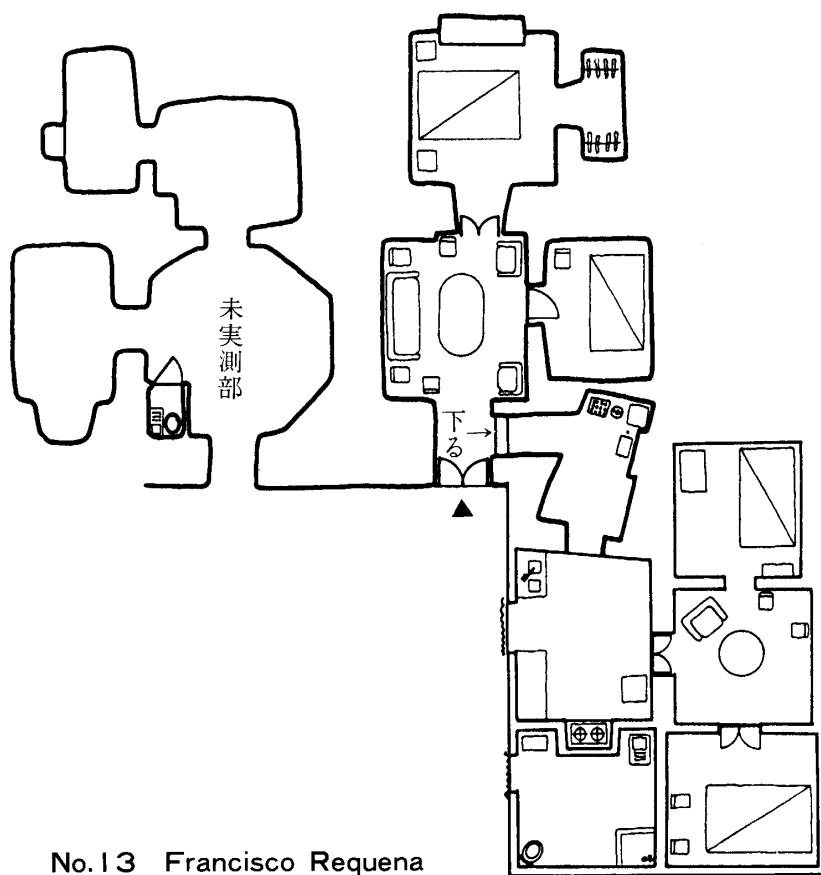


一見複雑な間取りだが、No.8と同じく典型的な農家の間取り。祭の日であったので多くの子や孫が来ていたが普段は老夫婦のみ。

No.12 Juan Perre



写真12 No.12の家前庭



No.13 Francisco Requena



写真13 No.13の家外観

家族は時折別荘代わりに使うだけで主にバルセロナに住んでいる。キッチン、トイレ等はすべて洞穴外の建て屋にある。左手洞穴は空き屋だが、玄関広間は天井が張っており、最も進歩した姿を見せている。



#### 4 洞穴住居の特徴

以下グアディスを中心に洞穴住居の特徴を列記しながら、写真と図でその一端を紹介する。

- ・街の中でも洞穴住居はできる。

傾斜地でさえあれば街の中でも洞穴住居は可能であり、実際、普通の家との融合があちこちで見られる。(写真14参照)

- ・屋根のスカイラインはそのまま岩山の稜線。

自然のスカイラインを乱すのはわずかに換気塔(チメネア)のみ。見事な自然との融合。(写真15参照)

- ・天然のバルコニー

この岩山に登った者は誰も、この辺りにバルコニーが欲しいと思うだろう。自然の地形の見事な活用である。(写真16参照)

- ・散歩道は屋根の上

地形に逆らわずトポロジカルに土地を利用する結果、小道はいつの間にか他人の屋根の上を通過しているのだ。(写真17参照)

- ・尻かくして頭かくさず

外構が発達してくると普通の住宅との見分けが付き難くなる。しかし、屋根を見ると洞穴住居であることはすぐに分る。小さな屋根であっても草の生えた部分を必ず残し、全部を漆喰でおおうということはしないからだ。(写真18参照)

- ・緑陰は宝石

入口付近の木は強い日指しを避けるための必需品である。樹木が無い場合、ブドウ棚が設けられることが多い。(写真19参照)

- ・-の空間と+の空間のドッキング

生活の向上に伴って、洞穴外に+の空間が増設される。多くは半屋外のサービスヤードとしてトイレや洗濯場やシャワーが設けられるが、近隣の人々との楽しみの時を過すミニサロンが設けられることもある。

また洗濯物はこのサービスヤードで干すため人目に触れることはない。(写真20参照)

- ・遊びの接客空間

幾何学的にキッチンとした開口部ができない訳ではないことは窓を見れば分る。気楽に友人達と過ごす空間としてはむしろこの方が楽しい。

この部屋に小型のレンジ、水道を備え飲食可

能とした例も少なくない。(写真21参照)

- ・増殖する空間

子供が生まれたら子供部屋を掘る。棚が必要な棚を掘る。子供の発達に応じて拡大することも可能だ。(写真22参照)

- ・壁の厚さが通路を形成

洞穴住居には廊下はない。しかし壁の厚さが異なる性格の空間を結びつける格好のインターバル(通路)となっている。外気温を和らげるラジエーター機能もこの壁厚がものをいっていると思われる。(写真23参照)

- ・水まわりはお手のもの

普通の家と違って、水まわりだからといって特別手がかかることはない。バスもトイレも器具さえ買えば据え付けは簡単にできる。左官仕事も楽だ。(写真24参照)

- ・寸法合せは不要

流し台を買えばその大きさに、洗面台を買えばその大きさに壁を掘り込む。寸法合せは要らない。生活に必要な空間を使いやすい形で掘り取るだけ。融通むげである。(写真25参照)

- ・壁は必要に応じて棚となり収納庫となる

使い易い高さ、大きさ、深さに掘り取るだけで棚となるが、かまちと扉をつければ申し分のない収納庫となる。(写真26参照)

- ・貯蔵室は多機能

時に物干場ともなる貯蔵室は、冷暗で年を通じて気温変化の少ない格好の食品貯蔵庫だ。その上この地方は湿度が低いいため肉塊を吊り下げておくだけでハムができる。アンダルシアはハムの名所でもある。(写真27参照)

- ・冷房いらず

実測した15軒のうちには車を持つ家もあったが、クーラーを見ることはついになかった。聞き取りの結果も、その良さの筆頭に夏の涼しさを上げている。(写真28参照)

- ・チメネアは生活のための生命線

換気塔の下は室内でも最も大切な場所として飾り立てられる。大抵の家はガスレンジを置くが、もともとの暖炉機能そのままに、薪にナベをかけ食事を作る家もある。いずれにしろ、命をつなぐ聖なる場としての意味が今も生きてい

る。(写真29参照)

・天井の形は自由自在

部屋の大きさに合せて天井高を決めるのは勿論、部屋の用途、雰囲気に合わせて形はいかようにもできる。大空間の場合は天井も高くなるが、その場合人工的に天井が架けられる場合もある。

(写真30参照)

・自然への回帰

捨てられた洞穴はすみやかに元の自然へと回帰するが、これは現代文明が失った大きなメリットといえよう。(写真31参照)

### 参考文献

- 1 「集落への旅」 原 広司 岩波新書
- 2 「住居集合論—その1」 S D別冊

3 「くいえ」とくまち 調査紀行」 S D85-06

4 「絵で見るヨーロッパの民家」 川島宙次  
相模書房

5 「イベリヤ半島の村と街II」世界の村と街# 9  
A. D. A EDITA Tokyo

6 「アンダルシアの洞穴住居調査(1)」黒川威人

7 「アンダルシアの洞穴住居調査(2)」渡辺有子・  
黒川威人 デザイン学研究 No. 68

調査協力：渡辺有子(東京芸大助手)

・奥田洋子(東京芸大院OB)

・黒川鈴代(北陸女子専門学校講師)

作図協力：河野希佳(金沢美大院生)

・清水隆司(同上)

写真：奥田洋子

凡例 ◎：クエバスが頭に付く集落

c：ミシュランの地図には載っていない同上集落

○：クエバスが頭に付かないが確認されている洞穴住居集落

☆：実際に踏査した洞穴住居集落(単体も含む)

★：実際に踏査した石器時代の洞穴遺跡

・：石器時代の洞穴遺跡

(昭和63年10月8日受理)



図1. スペインの洞穴遺跡および洞穴住居集落分布図



写真14



写真15



写真16

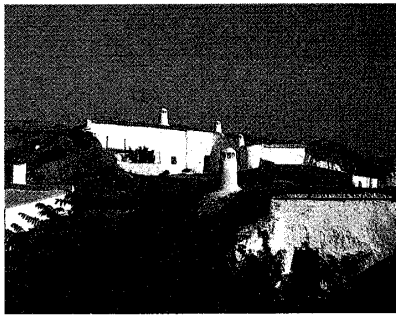


写真17

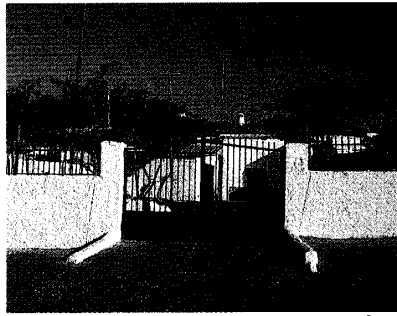


写真18

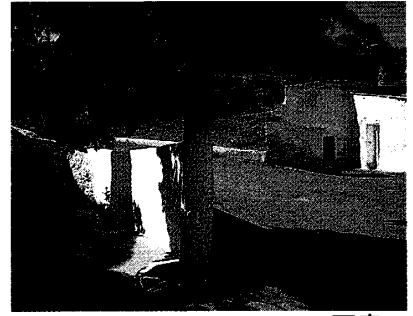


写真19

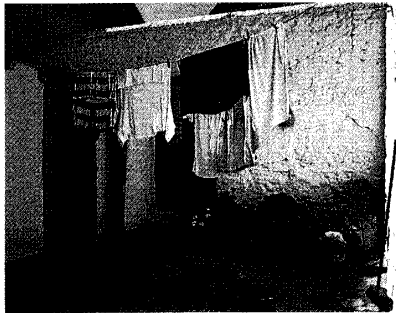


写真20

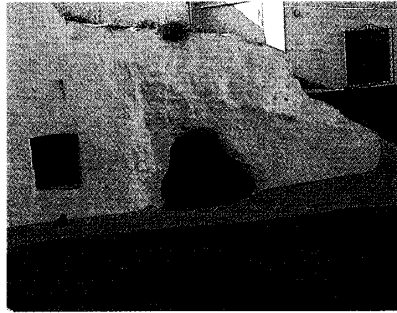


写真21

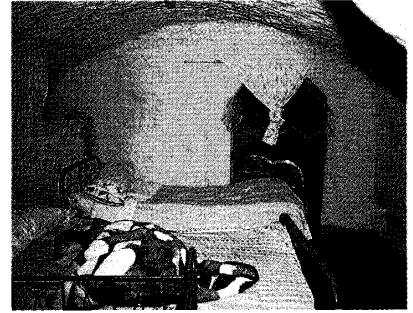


写真22

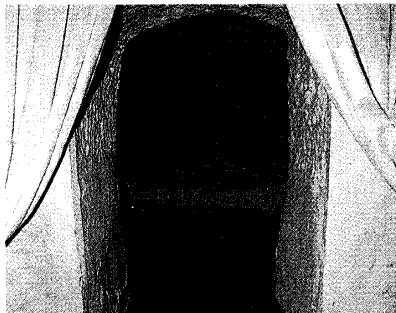


写真23

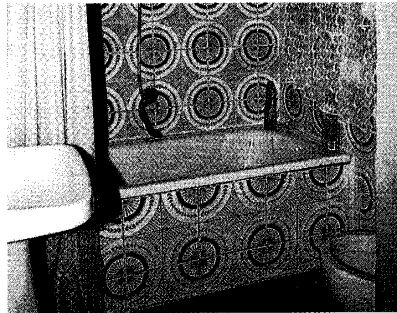


写真24

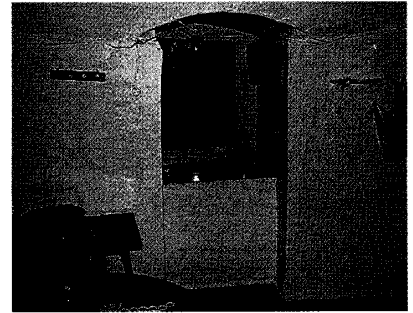


写真25

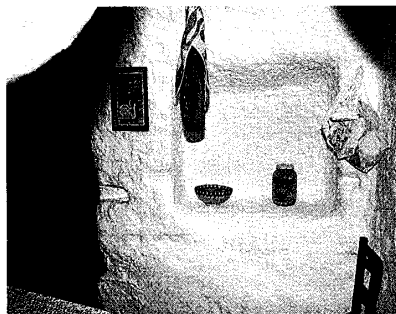


写真26



写真27

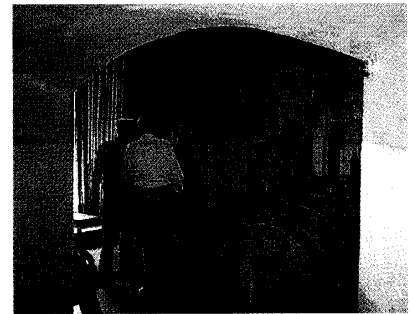


写真28

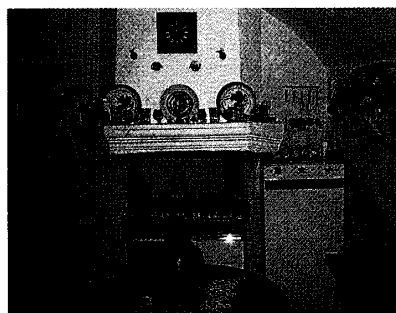


写真29

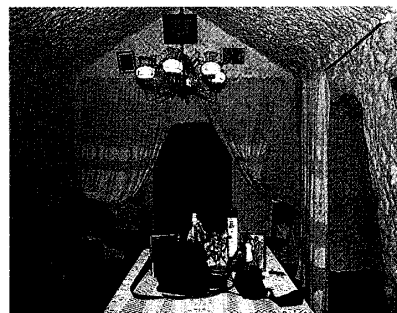


写真30

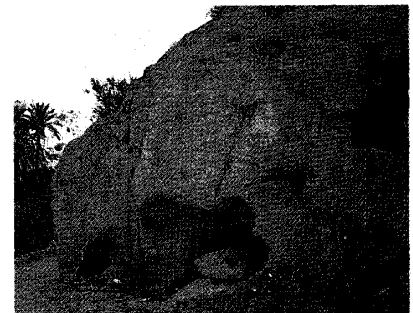


写真31